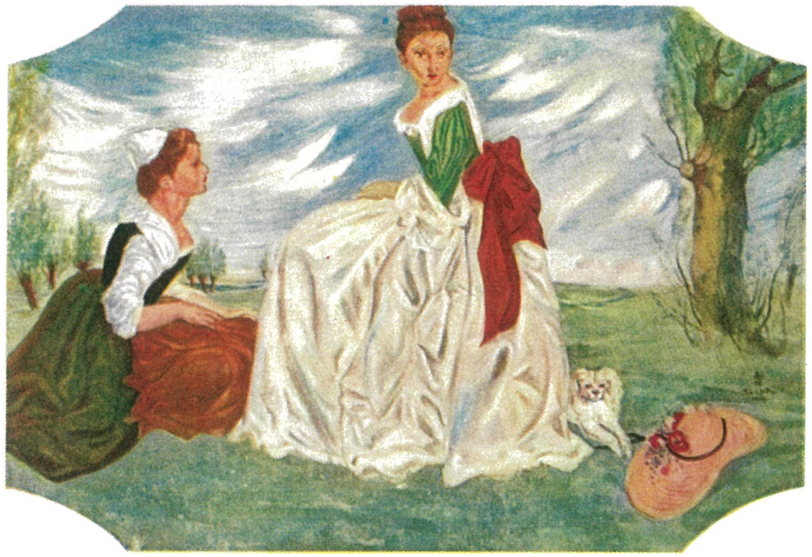

コロンバンの壁画

武藤仁叟

巨匠フジタには女の好みが厳存した。誰にでもあるがフジタ好みは厳しかった。このコロンバンの壁画（天井画と云った方が正しいかもしれぬ）は、当時、パリに一時帰国していたマドレーヌ夫人の面影が、縦から横から、到るところに描かれている。

流石のフジタ夫妻にも惓怠期が来ていた。フジタにつきまとっていなければ気のすまぬマドレーヌは、一刻はおろか一瞬の憩も巨匠に与えなかった。私は夫妻と一緒に旅行したことがあったが、度々フジタは行方不明になった。長時間ではないが、私はマドレーヌにうながされて一緒に索がしに行ったものである。漂然として、山を見たり、風のささやきを聞きたくなるのではなかったのか。

パリ会は現在尾張町ビルの七階だが、当時は六階にあった。パリ会に来ることもあったが、電話が頻繁であった。『おい。チョツトおりて来いよ』と。

夫妻は銀ブラをよくやった。マドレーヌは、何かと、フランス人風に銀ブラを娯しんだ。その都度、呼び出された。理由は決まっていた。フジタは、マダムから見るもの聞くもの事こまかに訴きただされるのに疲れきって仕舞って、筆者に応援を求めるためであった。性格もやや子供っぽかったが、ナンでもカで も得心のいくまでききただされるのは僕にもうるさかった。が、何しろパリジェンヌの美しいフランス語をあびせかけられるのであるから、云わば絶好のチャンスであった。フジタは、前にも書いたように、しばしば索がさなければならぬ程、行方不明になって、自分一人で散歩を娯しむ——かに見えた。私はその心境が読めてからは、フジタの姿に気をかけ乍らも、いそいでマダムの求めに応じなかった。その一連のフジタの心境がマダムのフランス行きを許したのである。夫妻にとってそれは雙方の救いであったろう。但し、さらでも金使いの荒っぽかったマドレーヌの、パリ滞在中にフジタにかかった負担は並々ならぬものがあった。そこに、この壁画の生まれたチャンスもあった。コロンバンの壁画は、フジタ夫妻が、東京とパリに別れ住むかもしれない運命の行きがかりを、天使の如く天から舞いおりて来て正しい道にもどしてくれたのでもある。コロンバンの負担も大きかったが、フジタの精進ぶりもスゴかった。当初、フジタは嬉しさを押しころし乍らもナカナカ承知しなかった。

幾往復する各人各様の『言葉の綾』の追想がなつかしい。ここに書くのは飛躍しすぎるが、フジタから電話で『マドレーヌが帰って来たからチョツトやって来いよ』と云うので行ってみると、サロンいっぱい色とりどりスーツケース。フジタにマダムが見せたのは先ず靴であった。キャツキャツと動物的な歓声を続け乍ら、フジタの前に積み上げられるのは、赤、緑、黄と美しく輝く靴の山。五十足にあまる靴の山であった。フジタでなければ、どの誰が、このパリジェンヌを飼うことが出来よう。苦々しい顔をチットもしないで、一緒に嬉しがって見ているフジタを、まずアキレて立ち去ったのは、姉中村夫人であった。

（フジタはその頃中村家の裏庭に、フジタ好みの小さい家をたてて住んでいた。）私はやがて寝室の隣にある風呂場に行ってみた。そこの鏡を見に行ったのである。そこの鏡に書いてあった字は消されていた。その鏡にはフランス語で、マドレーヌの字で『おまえ以外の誰もが此の鏡に写ることは許されない』と書いてあった。私はマドレーヌの留守中それを見ていたので、スキを盗んで見に行ったのであった。『おまえ』とは云うまでもなくフジタのこと。（よけいなことであるが夫妻間の言葉は最親愛語、おまえ、おれの言葉しか使用しない）

壁画の説明を云われていなが ら、画自身の説明よりも、画が書かれた頃の思出にばかりペンがそれて仕舞う。しかし、絵は、この原稿と共に原色に刷り出されるから、御覧の如く——と申し上げたい。最初に書いたように、この壁画は、フジタが結婚以来始めて別居した時の画で、描かれた人物の、どこかに恋女色とりどりスーツケース。フジタにマダムが見せたのは先ず靴であった。キャツキャツと動物的な歓声を続け乍ら、フジタの前に積み上げられるのは、赤、緑、黄と美しく輝く靴の山。五十足にあまる靴の山であった。フジタでなければ、どの誰が、このパリジェンヌを飼うことが出来よう。苦々しい顔をチットもしないで、一緒に嬉しがって見ているフジタを、まずアキレて立ち去ったのは、姉中村夫人であった。

（フジタはその頃中村家の裏庭に、フジタ好みの小さい家をたてて住んでいた。）私はやがて寝室の隣にある風呂場に行ってみた。そこの鏡を見に行ったのである。そこの鏡に書いてあった字は消されていた。その鏡にはフランス語で、マドレーヌの字で『おまえ以外の誰もが此の鏡に写ることは許されない』と書いてあった。私はマドレーヌの留守中それを見ていたので、スキを盗んで見に行ったのであった。『おまえ』とは云うまでもなくフジタのこと。（よけいなことであるが夫妻間の言葉は最親愛語、おまえ、おれの言葉しか使用しない）

壁画の説明を云われていなが ら、画自身の説明よりも、画が書かれた頃の思出にばかりペンがそれて仕舞う。しかし、絵は、この原稿と共に原色に刷り出されるから、御覧の如く——と申し上げたい。最初に書いたように、この壁画は、フジタが結婚以来始めて別居した時の画で、描かれた人物の、どこかに恋女房の頬が、唇が、眼が、つきまとう程に、うるさく、これでもか、これでもかと描き込まれている。むしろきざみ込まれていると云いたい。此の画の特徴は其処にある。清らかに美しい絵物語に借りた『ふきこぼれる情愛』の記録である。フジタをめぐる幾十幾百の女も、日を盗んでパリに羽根をのばしている現在の恋女房以外の片鱗も、この画には登場して来ない。云わば、巨匠フジタの上に一生一度しか来なかつた『お精進』の写真である。

さてこそ、やがて此の壁画、ローマにあるもろもろの壁画とは別の、パリにあるもろもろの天井画とは別の、廿世紀の生んだフジタと云う巨匠と共に、その巨匠が、ほんとうに生命からにじみ出る血をもって描いた記録として尊重されるのである。其の寂寥を、其の抱擁の夢を、其の歓喜の叫びを描いたもので、それは画——と云うにはあまりにも生命の躍動が盛り上がっている。神話ではなくて、生まの、銘刻である。今は只、一日も早く、この世紀の名画が公開されることを希望する。読者諸君の御協賛を希います。

追記。この読者の中には『お雪さん』という日本名までつけて日本につれて来たフランス夫人を知っている人もいられよう。又、現在パリに一緒に暮している現夫人日本女性を知っている人もいられよう。その方々は、この壁画の中に、見方に依れば上記の二人のドコかを発見なさるに違いない。そうだとすれば私が『マドレーヌいちずと憑かれたものの様に描いた』という点に疑いを持たれるに違いない。が、そこで最初に書いた『フジタどのみの厳しさと一貫性』を想起して頂きたいのである。私は勿論、第一夫人から、お雪さんから、マドレーヌは勿論、現夫人は、かくいう私が紹介し、巨匠に押しきられてお世話させられたのだから、一層よく知っているが、それはフジタにとって一貫したフジタ好みであって、大袈裟にいえば、一人の女性が衣裳を変えたか——、程度の変化しか感じられないのである。

約束の字数に到着してしまった。御不満の方があったら書信でおこたえ申すとして結とします。ともあれ、あの角店が完成しないのに『東京の宝石』の噂があった位だから、壁画が上げられた時の銀座人の誇はすさまじかった。いきおい『名古屋人の名古屋党』のために東郷青児の登場、名古屋コロンバンの壁画がケンランを競うことになった。壁画と共に掲げられる当時の写真、フジタが梯子に乗って仕上げをしている下に並んだ門倉国輝氏夫妻と支配人達の顔の輝き、筆者の嬉しさも最上である。（パリ会幹事長）